

『平家女護島』

「鬼界が島の段」は昭和五年一月、四ツ橋文楽座の竣工記念興行にあたって二代目豊竹古靱太夫（のちの山城少掾）が復活、その年の歌会始の題「海辺の巖」に因むとのこと。上演に際して古靱太夫は私家版の小冊子で、「明治二十三年十月一日初日ニテ御霊文楽座ノ立春姫小松ノ中ニ加エマシテ二代目竹本長尾太夫師ガ語ラレマシタ夫レカラ本年迄四十ケ年モ打チ絶エテ居リマシタ」とする。記録では明治二十七年にも出ているようで、ともかく、約四十年振りの復活で、古靱太夫によって命脈が保たれた作品とあっていい。

その際、東京の三味線豊澤松太郎から教わった古靱太夫は、大阪の七代目野澤吉兵衛が曲を知っていると聞いて、そちらにも教えを乞うたところ、双方の曲は細大漏らさず一致し、古靱太夫は伝承の尊さを改めて実感したと伝えられる。

クーデター未遂の「鹿ヶ谷事件」の首謀者として、俊寛僧都、平判官康頼、丹波少将成経が鬼界が島に流されたことは『平家物語』にも見える。鬼界が島は鹿児島県硫黄島だが、奄美大島に近い喜界島にも俊寛像がある。ひとり離島に残される俊寛の話は能「俊寛」（喜多流は「鬼界島」）になり、本作はそれを踏まえ、新たな設定で物語を展開する。

冒頭「もとよりもこの島は」は能「俊寛」の詞章で、語り口も謡がかり。「昔語るも」から、普通の義太夫節に戻る。冒頭五分近くは俊寛の独白に近く、絶海の孤島にある厳しさを描き出す。やがて、苔深い岩道を伝い降りる衰え果てた人影を認め、知らぬ内に餓鬼道に堕ちたのかと驚き、よく見れば平判官康頼、さらに丹波少将成経も訪れる。

少将が語る千鳥との馴れ初めは、きわどい喩えを駆使した色っぽいもの。三年ぶりに笑顔を見せた俊寛が、都の東屋に思いをはせるのが後半への重要な伏線で、初段（東屋の死）を見た観客には、やがて訪れる俊寛の悲しみを予測させる。

千鳥は萌葱の着付に波や貝の裾模様。海女という仕事柄、裾をからげるので女形には珍しく足を吊る。千鳥の詞は現地の訛りと称して、「蟹訛り」（「薩摩訛り」とも）をふんだんに混ぜて語られる。訛りで可憐にみせるのは昔から。

形ばかりの盃事のつもりで俊寛が父替わりとなったところへ、赦免の船が訪れる。二人上使は、一人が善方、もう一人が敵役というのが定番。丹左衛門と瀬尾は、半素袍の色も爽やかな納戸色と茶色で対照的。

のちの建礼門院、徳子中宮の平産祈念の特赦、しかし、俊寛だけは清盛の憎しみ強く赦されない。念のため礼紙（本文に添えてある白紙）も確認しますが俊寛の名はなく、悲嘆の極みにくれる。そこで丹左衛門が、俊寛も備前国（岡山県）まで帰参を認める赦し文を読みあげる。これは鳥羽宮

にいる後鳥羽法皇の内意を平重盛が病床で案じていたのを憶えていた教経が、丹左衛門に書き与えたもので、本作二段目口に教経・丹左衛門と瀬尾が言い争う場面がある。

俊寛の件は解決。ところが、千鳥を連れて帰ることは許されない。少将は、それならば島に残ると言いだし、俊寛と康頼も同調。苛立った瀬尾が喚き散らす中で、「俊寛が女房は清盛公の御意を背き、首討たれた」という一言が、俊寛に大きな打撃を与える。

浜辺にひとり残された千鳥のクドキは、率直そのもの。「栄耀栄花の望みでなし、蓑虫のやうな姿をもとの花の姿にして、せめて一夜添ひ寝して」という、ささやかな夢。

やがて岩に身を打ちつけようとする千鳥を止めて俊寛が、自分の代わりに千鳥を乗せてほしいと懇願。役目に忠実なるがゆえに非人情にもなる瀬尾は、当然のこと激怒し、俊寛は瀬尾の刀を抜いて切りつけ、長い立回りの末に倒すことになる。丹左衛門が止めを制止するが、俊寛は上使瀬尾を殺した罪で島に残り、その代わりに千鳥を本州に送って教経の温情に報いる道を選ぶ。妻のいない都に帰る望みはなく、現世の船ではなく、仏の誓願で彼岸へ渡して成仏させてくれる「弘誓の船」に乗るだけなのだ、と言う。その引き返せない決意を、瀬尾の首を切って示す「三刀、四刀ししぎる、引つ切る、首押し切つて立ち上がれば」で、昔は胴体を叩き切ったというが、初代玉男が喉元の骨を搔き切るように改められている。玉男はまた、刀扱いに慣れぬはずと、俊寛が瀬尾から抜き取るのを大刀でなく、脇差に変えている。この俊寛の行動に「船中わつと感涙に」というのは、少将や康頼だけでなく、縁もゆかりもない水夫たちまでも、ということか。

本作は、それまでの、取り残される俊寛を、自ら選んで島に残るように決断する俊寛に描き替えた。しかし、それほど覚悟の上でも、船が遠ざかると堪らなくなる。「思ひ切つても凡夫心」が名高い文句。大道具も替わり、まろび落ちながらも岩によじ登って、船影を追う目と指と。その思いを断ち切るような、「一人を捨てて沖津波」という冷徹さが、近松門左衛門の真骨頂。

(児玉竜一)